広島大学大学院教育学研究科紀要　第二部　第五八号　二〇〇九　三六三－三七〇

今昔物語集における用字について

刀田　絵美子

（受理日二〇〇九年一〇月六日）

一・はじめに

今昔物語集（以下、本集ともいう。）は、院政・鎌倉時代を代表する資料として、語学的・文学的に大きな位置を占めている。その用字研究は、使用基盤や、用字意識を探る方向で進められてきた[1]。

しかし、大部な資料であるためか、品詞ごと、あるいは、語単位での用字法研究にとどまっている、というのが現状である。

ただ、品詞ごとによる用字法の検討のみでは、その品詞で表れた特徴が、その品詞特有なものなのか、書記体系全体に関わるものなのか、という問題に発展させることはできない。また、個別の同訓異字語の実態を明らかにしている限りは、同訓異字語Aと同訓異字語Bが書記体系全体のなかで、どのような関係にあるのかを明らかにすることはできない。

例えば、稿者が前稿[2]で明らかにした、「アフ」の用字法が持つ問題は、本集の書記全体の中では、どのように位置づけることができるのだろうか。この問いに応えることができなければ、中世語の表記にどのような問題があるのかを明らかにすることはできない。

漢字の表記と語[3]の関係は、

① ひとつの漢字表記にひとつの語が想定される場合
② 複数の漢字表記にひとつの語が想定される場合
③ ひとつの漢字表記に複数の語が想定される場合

の三項目に分けられる。

本稿では、右の三項目のうち、①②について扱う。一字一字の漢字が、どのように使用されているかを調査する[4]ことを通して、これまで指摘されてきた本集の書記の特徴[5]が妥当であるか、さらに、どのような特徴を持つ語に同訓異字語が多いのかを示すことが本稿の目的である。また、本稿の調査を通して、本集の書記体系において問題となる語を抽出することで、本集における用字法研究の一助としたい。

調査対象として、本集を設定した理由は、次の三点による。

一　今昔物語集は、天竺部、震旦部、本朝仏法部、本朝世俗部から成る。それぞれの部においてどのような資料を出典として成立した説話であるのかが明らかにされている。今昔物語集を用いることで、出典文献における用字法との比較を行うことができる。

二　今昔物語集は、収録説話の性質から、院政・鎌倉時代の様々な相の表記を取り込んだ資料である可能性がある。今昔物語集を手がかりとして、院政・鎌倉時代の表記体系について、考えることができる。

三　今昔物語集の成立と近い時期に書写されたと考えられる[6]、鈴鹿本（京都大学図書館蔵）が現存し、影印本を使用することで、容易に調査することができる。

なお、調査は、鈴鹿本を底本とする日本古典文学大系本（以下、大系本）を対象とした。今昔物語集は、漢字と片仮名を交用する表記様式をとっており、そこに記された漢字がどのような語を表記したものであるかを推定する作業が重要になる。大系本は、観智院本類聚名義抄、三巻本色葉字類抄の訓を基本に

据え、それで処理がつかない場合は中世の古辞書を用いて、訓を確定する作業が行われたことが知られる。また、本集の中に散見する捨て仮名や文脈上の意味を考慮して付訓されている。以上のことから、現在でも有用な注釈書として、研究の対象とすることにした。

調査の範囲は、鈴鹿本に現存する巻二の第一話から第三十話に収録されている漢字の全てとした。その範囲で使用されている漢字は、延べ字数一万五千九百一字、異なり字数千五十七字（「々」を除く。）であり、考察し、仮説を提示するには十分であると判断したためである。

字体や捨て仮名については、適宜、鈴鹿本と照らし合わせた。また、『笠間書院索引叢刊12　今昔物語集文節索引巻二』に掲げられた音訓も参考にした。

二．調査結果

本節では、調査で得られた千五十七字（異なり字数）の内、訓読みすると推定できる七五五語について、一語に対応する漢字表記の数によって、【表2.1】から【表2.3】に整理した。なお、凡例は次の通りである。

【凡例】

①漢字の字体は大系本に依拠したが、一部、異体字を現行字体に改めた。

②推定和訓は大系本に依拠した。ただし、『笠間書院索引叢刊12　今昔物語集文節索引巻二』によって和訓を確定した例もある。その例には、＊とした。

③同一漢字表記のなかで、語幹が同じ語は一語とした。

（例）シカラバ・シカレバ

→この二語は、「然」に助詞「バ」が接続した例である。そのため、「然」の和訓としては一つとした。

④語形・語幹が同じでも、品詞が違うと認められる語は、別語とした。同一語形の場合は、語の後に品詞を記載する。

⑤品詞の確定は、日本国語大辞典（ジャパンナレッジプラス版）を中心に稿者が行った。

⑥一漢字で自動詞と他動詞が認められる場合は、両語とも掲載し、自他の別と活用の種類を記載した。

⑦用言の用例は終止形にし、収録した。

⑧鈴鹿本に付された仮名のうち、ハ行転呼した例は、もとの形に改めて掲載する。

（例）飢へ（巻二第二十七話）

→この例は「飢ヱ」として処理し、終止形「ウウ」として収録した。

⑨複合語の場合も一字ずつ分解して訓を施した。ただし、「カギリナシ」（「无限」）のように、一部の形容詞では、二漢字で一語と認定した。

⑩熟字訓は省いた。省いた例を左に挙げる。

商人（アキビト）・白沙（イサゴ）・従父（イトコ）・自然（オノヅカラ）・祖父（オホヂ）・漁取（スナドリ）・庫蔵（クラ）・今日（ケフ）・以来（コノカタ）・若干（ソコバク）・手巾（タナゴヒ）・毎度（タビゴト）・年来（トシゴロ）・外祖父（ハハカタノオホヂ）・他所（ヨソ）

【表2.1】一語と一表記が対応する例（部分）

推定和訓	漢字	推定和訓	漢字
アカ	垢	アト	跡
アカガネ	銅	アナ	坑
アカス	明	アナガチニ	強
アカツキ ＊	暁	アニ	豈
アキナヒ	商	アハレミ	哀
アキラカニ	明	アハレブ	哀
アク	開	アハレム	哀
アシ ＊	足	アヒ	相
アシタ ＊	朝	アヒダ	間
アソブ	遊	アフグ ＊	仰
アタ	怨	アブス	沐
アタタム	温	アブラ ＊	油
アタフ	能	アヘテ ＊	敢
アタフ	与	アマネク	普
アタラシ	新	アメ ＊	雨
アタル	当	アヤシム	怪
アツシ	熱	アユム	歩
アツム	集	アラジ	非

推定和訓	漢字
アラズ	非
アラソフ	諍
アラフ	洗
アルイハ（接続詞）	或
アルイハ（連語）	或
アルジ	主
イカガ・イカニ（など）	何
イカナル	何
イキ ＊	息
イクサ	軍
イケ ＊	池
イサゴ	沙
イササカニ	聊
イシヅエ	礎
イソグ	忿
イタス	致
イダス ＊	出
イタヅラニ	徒
イタム	痛
イチ ＊	市
イヅ	出
イヅレ	何
イトナム	營
イトフ	厭
イナヤ	否
イヌ	去
イノチ ＊	命
イノル	祈
イハホ	巖
イハムヤ	況
イフ	云

推定和訓	漢字
イヘ ＊	家
イホリ	菴
イマ（名詞）	今
イマ（副詞）	今
イマシメ	誡
イマダ	未
イヤシ	賤
イヨイヨ	弥
イル	射
イル	入
イロ ＊	色
ウ	得
ウウ	餓
ウウ	殖
ウカガフ	伺
ウク	受
ウケタマハル	奉
ウシ ＊	牛
ウシナフ	失
ウス（自下二）	失
ウスツク	春
ウタガヒ ＊	疑
ウツス ＊	移
ウツタフ ＊	訴
ウヅム ＊（他四）	埋
ウヅモル ＊（自四）	埋
ウヘ ＊	上
ウマ ＊	馬
ウマル（自下二）	生
ウミ ＊	海
ウム（他四）	生

推定和訓	漢字
ウヤマフ ＊	敬
ウラミ	恨
ウル	賣
ウルフ	潤
ウレフ	愁
ウエキ	樹
ウヲ ＊	魚
エラブ	撰
オイ	老
オク	起
オク	置
オクル ＊	送
オコス	發
オコス	遣
オス ＊	押
オソシ ＊	遲
オヅ	恐
オツト	夫
オトス	落
オトル	劣
オドロク	驚
オトロフ	衰
オナジ	同
オノオノ	各
オノヅカラ	自
オハシマス	御
オフ	追
オホキニ	大
オホシ	多
オホス	仰
オボス	思

推定和訓	漢字
オホフ	覆
オホヤケ	公
オモシ	重
オモムク	趣
オヨビ ＊	及
オヨブ	及
オル（自上二）	下
オロカニ	愚
オロス（他四）	下
カ	日
カ ＊	彼
カウバシ	香
カカグ	挑
カガミ ＊	鏡
カカヤク	耀
カガユ	香
カキ	垣
カギリ	限
カギリナシ	无限
カク	歟
カク	縣
カグ	香
カクス	隱
カコム ＊	圍
カサ	瘡
カサ ＊	笠
カサヌ ＊	重
カシク	炊
カシコシ ＊	賢
カシヅク	傳
カシラ	頭

【表2.2】一語と二表記が対応する例

推定和訓	漢字	推定和訓	漢字
カゼ＊	風	カナヤ	哉
カゾフ	計	カナラズ＊	必
カタ＊	方	カハ＊	河
カタキ	敵	カハヤ	廁
カタシ	難	カヒゴ	卵
カタジケナシ	忝	カヒナシ	甲斐无
カタナ＊	刀	カフ	替
カタハラ	傍	カフ	買
カタビラ	疊	カヘス（他四）	返
カタム＊	固	カマフ＊	構
カタラフ	語	カミ	上
カタル	語	カミ＊	神
カテ	粮	カミ＊	髪
カナシム	悲	カメ	瓶
カナフ	叶	カヨフ	通
カナヘ	釜	カラム	搦

推定和訓	漢字	推定和訓	漢字
アラハル＊	現・顯	カク	此・如
アリ	有・在	カズ	員・数
イダク	抱・懷	カタチ＊	形・躰
イタル	詣・至	キク	聞・聴
イユ	愈・喻	クスリ＊	醫・藥
ウチ＊	内・中	クラフ	食・噉
ウツ	打・罰	ココニ	此・爰
オソル＊	恐・怖	コト	言・語
オツ（自上二）	落・堕	コトバ	言・詞
オモフ	思・欲	コフ	請・乞
オヤ	祖・親	コレ＊	此・是

推定和訓	漢字	推定和訓	漢字
サカリニ	盛・壮	ノム	飲・呑
サキ	前・崎	ハコ	箱・篋
サト	郷・里	ハヤシ＊	早・速
サトル	悟・達	ヒソカニ＊	蜜・竊
サル	去・除	ヒトリ	一・獨
シカリ	而・然	フス	臥・伏
スコシ	小・少	フラス（他四）	雨・降
スツ	弃・捨	フル（自四）	雨・降
スム	住・棲	フルシ	舊・故
タカラ	財・寶	ホカ	他・外
タダ	只・但	ホトリ	邊・側
タツ	立・起	マコト	實・誠
タハブル	戯・抶	マサニ＊	正・當
ツク	突・搗	マサル	勝・増
ツク	付・着	マタ＊（接続詞）	亦・又
ツクル	作・造	マタ＊（副詞）	亦・又
ツヒニ	終・遂	マツル	祠・祀
トガ	咎・過	ミチ＊	道・路
トツグ	娶・嫁	ミヤコ＊	城・都
トドム	留・止	ムスメ	娘・女
ドモ	共・等	ムラ	村・邑
ナガシ＊	永・長	メ	婦・妻
ナク	泣・哭	メグラス（他四）	遶・廻
ナグ	擲・投	メグル（自四）	巡・廻
ナス	作・成	ヤブル	壞・破
ナホ	尚・猶	ユルス	許・免
ニギル	拳・把	ヨシ	善・吉
ニナフ	擔・荷	ヨブ	呼・喚
ヌル	濡・濕	ヨリテ	仍・依
ネムゴロニ	寧・懇	ヲサム	納・治
ノボル	昇・登	ヲハル	終・畢

【表2.3】一語と三表記以上が対応する例

推定和訓	漢字	推定和訓	漢字
アグ アマタ イカル カザリ カヘル（自四） シヅム	稱・擧・上 数・衆・多 瞋・忿・嗔 餝・嚴・荘 返・還・歸 没・沈・湮	トル ヒク マウス モト アフ	把・取・捕 曳・引・牽 言・白・申 下・許・本 遇・會・合・ 値・相

今回調査した全三十話から、訓読みすると思われる七五五語を得た。そのうち、一語に一表記が対応する例（【表2.1】）は、六六十例（八十七・四％（小数点第二位を四捨五入。以下同じ）、一語に二表記が対応する例（【表2.2】）は、八四例（約十一・一％）、一語に三表記以上が対応する例（【表2.3】）は、十一字（約一・五％）であった。それぞれの割合をみると、一語と一表記とが対応している例が、約九割であることが分かる。このことから、従来の研究で指摘されていたように、本集の用字体系は、「一語に一表記が対応することが大半で、大局的に見れば極めて安定してい」[7]るといえよう。

三、一語に複数の漢字表記をとる語の特徴

一語に対して、複数の漢字が用いられる語には、どのような特徴があるのだろうか。

まず、使用される漢字の数ごとに、品詞別の用例数を調べた。各品詞ごとに、一語に対して何種類の表記があるか割合を調べ、【表3.1】に示す。（以下、空欄は零を示す。）

【表3.1】より、全体数の少ない品詞もあるが、大体の品詞において、一語に一表記が対応する割合が、八割強であることがわかる。ただ、名詞は、一語に一表記が対応する割合が、他の品詞より高い。

名詞は、事物の名を特定（＝同一化）し、事物を静的にとらえる性質を持つ品詞である。逆に、異なる二つの事物が同一でないことを表すためには、別語が用いられる。そのため、漢字によって多義を表す必要性が低く、一語に対し、複数表記になりにくいのだろう。

【表3.1】各品詞における、語と表記の関係

	動詞	形容詞	形容動詞	名詞	代名詞	副詞	連体詞	接続詞	助詞	助動詞	その他	合計
一語一漢字 語数	308	42	18	223	7	36	2	4	6	9	5	660
一語一漢字 %	85.6	89.4	81.8	90.3	87.5	87.8	100	57.4	100	100	83.3	87.4
一語二漢字 語数	44	5	4	21	1	5		3			1	84
一語二漢字 %	12.2	10.6	18.2	8.5	12.5	12.2		42.9			16.7	11.1
一語三漢字上以 語数	8			3								11
一語三漢字上以 %	2.2			1.2								1.5
合計 語数	360	47	22	247	8	41	2	7	6	9	6	755
合計 %	47.7	6.2	2.9	32.7	1.1	5.4	0.3	0.9	0.8	1.2	0.8	

次に、一語に使用される漢字表記の数ごとに、品詞別の用例数を調べた。【表3.2】に示す。

【表3.2】一語における表記の種類と品詞の割合

	一語一漢字		一語二漢字		一語三漢字以上		合計	
	語数	%	語数	%	語数	%	語数	%
動詞	308	46.7	44	52.4	8	72.7	360	47.7
形容詞	42	6.4	5	6			47	6.2
形容動詞	18	2.7	4	4.8			22	2.9
名詞	223	33.8	21	25	3	27.3	247	32.7
代名詞	7	1.1	1	1.2			8	1.1
副詞	36	5.5	5	6			41	5.4
連体詞	2	0.3					2	0.3
接続詞	4	0.6					7	0.9
助詞	6	0.9					6	0.8
助動詞	9	1.4					9	1.2
その他	5	0.8	1	1.2			6	0.8
合計	660	87.4	84	11.1	11	1.5	755	0.8

【表3.2】より、一語に対し複数表記をとる割合が高い品詞は、動詞であることが分かる。

動詞は、事物の動作・作用・状態・存在などを時間的に持続、または変化していくものとして捉える性質を持つ語である。そのため、類似する動作などを同じ語で表し、意味の違いを表すために、異なる表記を用いるということが、現代の表記にも往々にして見られる。そのように考えると名詞に比べ、多義的になりやすい品詞であり、それが本集の用字法にも反映されているのではないか。

なお動詞は【表3.1】より、今回得た七五五語のうち、四七.六％を占める。そのうち、一語に複数表記をとるのは十四.五％にあたる。このことから、動詞は従来の研究で副詞や形容詞を用いて行われたような、体系だった用字法の検討が行われるべき品詞である。

四. おわりに

本稿で明らかになったのは、三点である。

①今昔物語集に使用されている語の約九割が、一語一表記である。
②名詞は、一語に一表記をとる割合が高く、一語に複数表記をとる割合が低い。
③複数表記をとる語は動詞に多い。

本稿での調査範囲は今昔物語集の一部にとどまったため、調査の範囲を広げ、他の巻でも今回得られた結果と同様の結果が得られるのか検討していかなければならない。しかし、従来検討されてきた品詞や語は、本集全体の書記の中では、ほんの一部である（例えば、従来の研究で調査されてきた副詞は全体の割合からみると、五％強であった。）ことが今回の調査で分かった。

今後は、従来の研究で提示されてきた仮説が、書記体系全体を見渡した時にも立証できるのかどうか、用字法の再考・探究を続けたい。

また、今回は扱わなかったが、今昔物語集の書記体系が、どのような相の書記を基盤としているか、古辞書や同時代文献との比較を通して、考えていきたい。

【注】

(1) 例えば峰岸1986では、今昔物語集の副詞の検討から、「本集における漢字使用の単調さ（中略）換言すれば、本集において副詞の漢字表記が用字上統一的であるということでもある。過半の副詞については、集全體を通じてた

だ一種の漢字によってその表記が行われる。數種の漢字を使用する場合も往々に存するが、大半は二三種であって、多種に及ぶことは極めて稀である。」（p.715）と述べる。今回の調査で得られた、個々の語の具体的な検討については、別稿を準備している。

(2) 拙稿「鈴鹿本『今昔物語集』における「アフ」を表す漢字の用法について」（広島大学教育学部国語教育学会『国語教育研究』第五〇号、二〇〇九年三月）本論文では、「アフ」という語に対し、七種の漢字が用いられていること、また、それらの用字法を明らかにした。

(3) 本稿では、漢字の音訓のうち、和訓のみを問題とし、字音は研究の対象から外した。そのため、以下、和語という意味で「語」を用いる。

(4) 今昔物語集には、仮名で書かれた自立語（巻二では「カクテ」など。）も存在するが、本稿の目的から研究の対象外とした。別稿で仮名書き例を含めた、個々の語をどのように表記するかを検討する。

(5) 峰岸1986では、数種の漢字をその表記に用いる語について、「その使用度数が特定の漢字に集中する」ことを述べる。即ち、「語とそれを表記すべき漢字との關係が緊密で、各語にはそれを表記するための特定の漢字が定着していたことを暗示する」という。また、訓点資料・三巻本色葉字類抄とを比較し、「本集の副詞の表記に使用された漢字もまた、日常常用の漢字ということになろう」とする。

(6) 小田・中村・古川「鈴鹿本今昔物語集の年代測定」（安田章編1997）では、鈴鹿本の綴じ糸の年代測定から、今昔物語集原本が成立したとされる院政期に、鈴鹿本もまた書写されたとする。

(7) 田中牧郎「仮名交じり文3『今昔物語集』」（佐藤喜代治編1983）

【引用参考文献】

テキスト・影印・索引

今野達校注『新日本古典文学大系』33―37　今昔物語集』岩波書店、一九九三年一月―一九九九年七月

安田章編『鈴鹿本今昔物語集　影印と考証』京都大学学術出版会、一九九七年五月

山田孝雄・山田忠雄・山田英雄・山田俊雄校注『日本古典文学大系』22―26　今昔物語集』岩波書店、一九五六年三月―一九六三年三月

古辞書

天理図書館善本叢書和書之部編集委員会『天理図書館善本叢書和書之部』32―34　観智院本類聚名義抄　佛法僧』八木書店、一九七六年九―十一月

中田祝夫・峰岸明共編『色葉字類抄　研究並びに総合索引　黒川本・影印篇』風間書房、一九七七年五月

中田祝夫・峰岸明共編『色葉字類抄　研究並びに総合索引　索引篇』風間書房、一九七七年五月

前田育徳会編『尊経閣蔵三巻本色葉字類抄』勉誠社、一九八四年五月

正宗敦夫編『類聚名義抄　第一巻・第二巻』風間書房、一九七八年十二月・一九八一年四月

文　献

佐藤武義『今昔物語集の語彙と語法』明治書院、一九八四年五月

藤井俊博『今昔物語集の表現形成』和泉書院、二〇〇三年十月

峰岸明『平安時代古記録の国語学的研究』東京大学出版会、一九八六年二月

山口佳紀『古代日本文体史論考』有精堂出版、一九九三年四月

論　文

小田寛貴・中村俊夫・古川路明「鈴鹿本今昔物語集の年代測定」（安田章編『鈴鹿本今昔物語集　影印と考証』京都大学学術出版会、一九九七年五月）

高橋敬一「今昔物語集における漢字の用字」（『福岡女子短大紀要』第十四号、一九七一年十二月）

田中牧郎「仮名交じり文3　『今昔物語集』」（佐藤喜代治編『漢字講座＝5　古代の漢字とことば』明治書院、一九八八年七月）

山田俊雄「真字熱田本平家物語の漢字とその用法の一側面（二）―主として巻第二についての調査を通して見た―」（『成城文藝』第十二号、一九五七年十一月）

データベース

国文学研究資料館・日本古典文学本文データベース　http://base3.nijl.ac.jp/Rcgi-bin/hon_home.cgi

知識探究サイト・ジャパンナレッジプラス・日本国語大辞典http://www.jkn21.com/individualsearch

（主任指導教員　佐々木　勇）

刀田絵美子

How is the Chinese Character Used, in “Konjyakumonogatarisyu（今昔物語集）”?

Emiko Toda

Abstract: “Konjyakumonogatarisyu（今昔物語集）” is the good source in the middle age in Japan. This thesis makes report about how the Chinese character was used, they are in 30th story from the first story of “Konjyakumonogatarisyu（今昔物語集）” volume 2. The results of the investigation is recorded as follows: one chinese character in the single word is 87.4%, two chinese characters in the single word is 11.1%, more than three chinese characters in the single word is 1.5%. And the noun is often one chinese character in the single word. On the other hand, a lot of more than two chinese characters in the single word is in the verb.

Key words: Writing System, ‘DOUKUN-IJI (One word different characters)’, The Word in the middle age in Japan
キーワード：表記体系・同訓異字語・中世語